



from Zimbabwe

## ハイパーインフレから デフレへ

ジンバブエは、世界三大瀑布の一つ「ビクトリアの滝」、サファリ、世界遺産「グレート・ジンバブエ」等の遺跡が有名ですが、近年は「ハイパーインフレ」でも注目された国です。筆者は、経済の混乱に伴い長年中断されていた、同国の国際収支統計作成の再開を支援するため、昨秋、首都ハラレを訪れました。

ジンバブエは肥沃な土地を活かし、ローデシアと呼ばれた英国の植民地時代から農業が盛んでした。2000年以降、ムガベ政権が白人から農場を強制収用すると、主食のとうもろこし、肉類、酪農品の供給が急減し、さらに干ばつもあり、極度の食料不足に陥りました。白人農場主が経営していた頃は、各農場が数百人規模で労働者を雇い、国内外の市場向けに生産していたものの、農地を奪取した退役軍人や零細農は自給自足にとどめ、供給が激減したのです。こうした中、政府が中央銀行に高額紙幣を次々と発行させたことから、08年には一時期、年率2億%超



トマト積み、路上に立つ人、座る人……ハラレの日常風景です



中央が市内最高層の準備銀行。建物内に滝があります

のインフレを記録しました。

ハイパーインフレ当時の話を聞くと、「食糧不足が深刻で、輸入切り替えに時間がかかった。都市部ではジンバブエドルを早々に諦めて、南アフリカ・ランドやアメリカ・ドル等外貨がいち早く流通したため、ハイパーインフレ自体は問題でなかった」とのことでした。09年以降、実態を追認する形で米ドル等外貨紙幣が法定通貨となりました（自国紙幣は廃止）。

この間、300万人以上のジンバブエ人が国外へ逃避し、今も国外で働いているそうです。こうした人口流出、高い失業率を反映して国内需要が減少する中、14年後半以降消費者物価は前年比マイナスに転じ、デフレとなっています。

こうした経済状態にもかかわらず、治安は良好で、人々は友好的です。また、地元産ダイヤモンド以上に輝く子供たちの目を見ると、「MOYO WANGU ZIMBABWE（モヨワングジンバブエ）」（私の心はジンバブエと共にある）という地元シヨナ語の言葉が心に沁みてきます。

大自然や遺跡のみならず、人の魅力にも溢れたこの国に、皆さんも一度訪れてみてはいかがでしょうか。

（国際通貨基金、本部：ワシントン）

\*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。